

小説の映画化がうまくいかない理由の 98%は…カズオ・イシグロが訴える映画製作者への“本質的な提言”《映画『遠い山なみの光』への評価も》9/6(土) 17:12 配信

カズオ・イシグロ氏が 1982 年に発表した長編第一作『遠い山なみの光』が映画化された。日本人の両親を持ち、5 歳まで長崎で暮らした後、両親とともにイギリスに渡ったイシグロ氏に訊いた。（聞き手・構成 大野和基）

監督にお願いしたこと



カズオ・イシグロ氏

——優れた小説を映画化しても傑作になるとは限りません。イシグロさんは黒澤明監督の『生きる』（1952 年）をロンドンを舞台にしてリメイクした『生きる LIVING』（2022 年）の脚本を手掛けています。**小説の映画化を成功させるためには、何が大切だと考えていますか？**

イシグロ その問いに対するシンプルな答えはないのですが、小説の映画化がうまくいかない理由はほとんど一緒です。私はたくさんの映画を見てきました。大の映画ファンです。よく知られた名作の映画化がうまくいかないときの理由の 98%は、**映画製作者が原作に忠実すぎる**ことです。

私は小説を書くだけでなく、脚本も書いてきたので、小説と映画の形式がいかに異なるかを理解しています。小説に書かれていることを映画に移し替えるに

は、膨大な作業が必要とされますが、**それはたいてい過小評価**されている。ページ上ではとてもうまくいっていることでもスクリーン上ではまったくうまくいかないことが多いのです。

また、小説の映画化がうまくいかないのには、もう一つの理由があるように私には思えます。それは**原作に物語のすべてが用意されていると考え、想像力をはたらかせることを怠ってしまう**ことです。「原作では、こんなことが起きている。ではそのままやってみよう」という誘惑に駆られてしまうのです。でも、実際に小説を映画にするには、オリジナル脚本を書くのと同じぐらいの想像力をはたらかせる必要があります。映画という形式では、何がうまくいくのかをじっくりと吟味しなければならないのです。

ですから、石川監督と仕事を始めることになったときには、最初に「原作をあまり尊重しすぎないでください。**まったく尊重しないぐらいでけっこうです**。この小説を映画化したいと思わせたもの、**あなたにとってかけがえのないものを映画にしてください**。小説と違っていても気にしません。それが物語の本質なのですから」と伝えました。

ホメロスやギリシャ悲劇、シェークスピア、世界各地の民話など、世代を越えて受け継がれてきた物語がありますが、**人々はそれらを改変し、何かを付け加えてきました**。そのように受け継がれたからこそ、今でも生き生きとしたかたちで残っているのです。

近代や現代の小説を映画化するときにも、映画製作者にはそれと同じ態度で臨んでほしい。**原始人が洞窟のなかで焚火を囲んで座り、お互いに好きな物語を語り合っている光景を思い浮かべてみてください**。物語に耳を傾けているあなたは、**誰かが物語を語るたびにそこに少しでも新しい息吹が吹き込まれるのを望むこと**でしょう。

ですから、私は常に映画製作者には**原作から前に進み、原作を自分のものとして、今を生きる人々にとって価値のある物語を創造することを望んでいます**。博物館で展示されている昔の遺物にしてはいけません。

長崎の特別な思い出

——今でも鮮明に思い出せると語られている、イシグロさんが5歳まで暮らしていた長崎の街や風景が映画で再現されました。ご覧になっていかがでしたか？

イシグロ かなりノスタルジックな気持ちになりました。長崎には、たくさんの思い出がありますから。

石川監督はロケ地を求めて長崎を訪れたものの、当時の面影はまったく残っていなかったのも、**他の場所で撮影**しなければならなかった。でも、だからこそ私が小説で描いた長崎を彷彿とさせる映像を創造できたのだと思います。

小説のなかの長崎は、私の主観的な記憶や家族アルバムに残された写真に基づいて書かれたものです。**監督は細心の注意を払って、私の記憶を再現しようとしてくれたように思います。**特にケーブルカーで稲佐山に登るシーン。小さい頃に行った、あの小旅行のことをとてもよく覚えています。稲佐山は長崎の市街と目と鼻の先にあるのですが、私にとって、そこに出かけていくことは、とても特別なことでした。3、4回は行ったと思います。そこを訪れたときの写真が家族アルバムに残っています。**映画のシーンを見たときには、私の記憶と写真の双方が、ほとんどそのままスクリーンに映し出されたように感じました。**

でも、実際には少しタイムスリップが起きているんです。映画の舞台となっている1950年代前半には、まだケーブルカーは開通していなかった。映画のように山頂までケーブルカーで行くには、それから数年待たなければなりません。でも、**監督は小説と映画になくてもならないシーンだと考えて、史実とのズレはかまわないと考えた。**そのおかげで小説に書いたシーンがそのまま映像化されることになったのです。

※本記事の全文（約8500字）は、月刊文藝春秋のウェブメディア「文藝春秋 PLUS」と「文藝春秋」2025年9月号に掲載されています（カズオ・イシグロ「日本はいつも面白い話に溢れている」）。全文では下記の内容をお読みいただけます。・四度目の正直・忘れられつつある核の恐怖・取り残された人々への共感・厄介事が及ばない場所